



カラマツを使った住宅（佐久地方事務所林務課提供）

学校などの公共施設では、カラマツの集成材を利用しているところが増えている。これからは赤身と木目が特徴的なカラマツの住宅利用が見込まれる。



木曽五木を使った住宅（信州木曽の家協同組合提供）

木曽五木（ヒノキ・サワラ・ネズコ・アスナロ・コウヤマキ）の適正を生かして住宅に利用する取り組みが進められている。木の独特の性質が健康面や耐震性などの面で見直されている。



新エネルギーを利用した住宅

（ソーラーシステム株式会社提供）

太陽光発電の利用で、日照時間に恵まれた松本市など県中南部では、使用量を上回る発電量が期待できる。



屋根の融雪ができる住宅（飯山市 2001年撮影）

深雪地帯では雪下ろしがとても大変である。熱を利用して屋根の雪をとかず住宅が工夫されている。

あかり

長野県ではじめて電灯がともったのは長野市で、1898年（明治31）のことで、今では簡単に明るい部屋で生活することができますが、以前はどのような工夫をして家の中を明るくしていたのでしょうか。

（田村栄作）



釣手土器（諏訪市博物館蔵）
複製した釣手土器で火を燃やしている。



炉であかりをとる（長野県立歴史館常設展示室）
炉はあかりをとる、調理をする、暖房をするなどの役割があった。

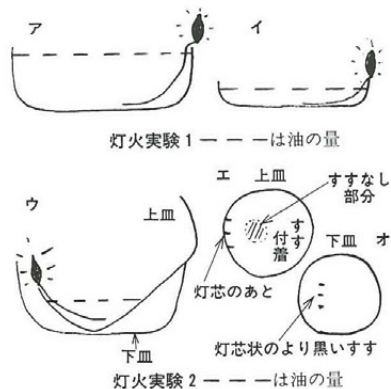
①火を使う—原始—

縄文時代、火は物を煮炊きしたり、暖をとったりするほかに暗い家のなかを明るくしました。木や草を燃やす炉のあかりを利用したのです。とはいえ、今と比べて、はるかに暗い感じになります。

縄文土器のなかには、あかりをとるために使ったものもあります。

②油を使って灯をともし—古代・中世—

歴史館の復原展示である鎌倉時代善光寺門前では、寺庵や仏師屋のなかであかりをとるために使った道具を見つけることができます。植物の油をしぼった灯油を皿に入れ、そこに芯を立てたものが使われました。しかし、油は高価なもので、広くは使われませんでした。一般には松明や囲炉裏の火があかりとして使われていました。



油皿を二枚使って灯をともした実験（鳥羽英継による）
一枚を傾けて使うことで少ない油でも火をつけることができた。
高価な油を使うための工夫としての可能性も考えられる。



結灯台と油皿（長野県立歴史館蔵）
植物からしぼった油を入れて、芯を立てて使った。
油は高価だった。

③庶民の夜のくらしの変化—近世—

江戸時代になると、夜あかりをつけて生活する時間が増えました。囲炉裏や松明のあかりだけでなく、いろいろな灯火具が考え出されたのもこの時代です。行灯や提灯は使い道により、地域により、いろいろな形がありました。



いろいろな灯火具 (長野県立歴史館蔵)

ひで鉢の上で松の根を燃やしてあかりをつけて夜なべ仕事をした。ろうそくなどの生産が増え、行灯や手燭にさしてあかりをとることもあった。



④ランプや電気で明るく—近現代—

明治になると文明開化の波とともに石油ランプが多く使われました。ランプにはすすがつきやすく、このすすを落とすのが子どもたちの仕事でした。

発電所ができて電灯が各家にとると、電灯は以後急速に広まっていきます。一軒で一灯だけという家も多くありました。電灯が移動すると家族もいっしょに移動するということもめずらしくありませんでした。今のようにならなくても電灯がつくわけではなく、使える時間は決まっていた。

第二次世界大戦中、空襲警報が発令されると、各家庭は電灯を消したり、暗くすることが義務づけられました。あかりを隠すため、電球におおいがつけられることもありましたが(灯火管制)。

石油ランプ

(望月町教育委員会蔵)

石油ランプは各家に電灯が引かれるまで広く使われた。電灯の明るさにはとうていおよばなかった。



灯火管制の電球とおおい

(望月町教育委員会蔵)

灯火におおいをつけると外に光がもれにくくなる。空から場所がわからないようにするための工夫。



電球と蛍光灯

はじめは裸電球が使われたが、その後おおいがつけられた。蛍光灯は第二次世界大戦後から使われはじめた。



「日本の屋根」 信州の住文化

竪穴住居の耐寒性

縄文時代の住居跡によく保存されている竪穴住居は、縄文・弥生時代のみではなく、東日本では多くの人びとにとって奈良・平安時代まで一般的な住まいでした。半地下室的な造りは、寒い信州ではきわめて合理的な建築物であったといえます。一DKの間取りは実に単純で、真ん中に掘られた炉は、炊事と暖房を兼ねていました。この一間が台所・食堂・居間・寝室などいろいろな機能を満たしていたのです。

竪穴住居は耐寒性に優れているので、八ヶ岳南西麓の山浦地方では、第二次世界大戦後まで、「穴倉」と称する竪穴式の小屋を冬期間設けていました。三から四戸の農家が共同して、深さ一拵、広さ三坪（約一〇平方拵）ほどの穴を掘り、その上に稲わらの掘立小屋を設けて、そのなかでやら細工をしていました。縄文時代の知恵がごく最近まで縄文遺跡の多い山浦地方で生かされていたのです。

柱割りと畳割りの間取り

県立歴史館の常設展示に、江戸初期に建てられた三水村の滝沢家があります。中農の上層であった同家は、柱によって適当に部屋が仕切られています。したがって六畳間・十畳間というきちつとした間取りがありません。そこで後世畳を敷くようになると、敷きあまりが出るので、特製の畳を敷くか、床を張り直しました。

畳割りの間取りは、室町時代の書院造りから始まりますが、江戸時代になっても畳敷きの家に住めるのは、武士や豪農・豪商などで、中農以下の人びとは畳を敷くことはできませんでした。また畳のサイズは「京間」「中間（中京間）」「江戸間」など地域によって異なっていました。江戸間は今では「東京間」といわれ、一間の長さで六尺（約一八〇センチ）幅です。信州の畳は関東の江戸間が基準でした。しかし江戸でも茶室や寺院などでは京間の畳が用いられていました。

雪に強い深雪地帯の住宅

中野市の高社山と大町市の中綱湖を結ぶ線から以北の信越国境は北陸型気候区

で、世界有数の深雪地帯です。栄村森宮野原駅では一九四五年二月に七八六センチ、また小谷温泉でも同年二月に七四二センチを記録したことがあります。一晚に一拵積もることもめずらしくありませんが、積雪の比重平均が〇・三とすると、一方拵の屋根に三〇〇グラムの負担がかかることとなります。そこで積雪が一拵以上になると、雪下ろし（雪掘り）という）をしないと建物が危険になるのです。

信越国境の深雪地帯では、古い民家という「中門造り」が一般的でした。中門造りは北は津軽平野から南は信越地方の日本海側に一般的にみられます。茅葺きの母屋の平に中門という玄関がつけれ、ここでは雪は左右に下ろされるので出入りには便利です。栄村の阿部家のように茅葺き入母屋造りの母屋に茅葺き屋根の中門をつけた家を「厩中門」、また杉皮もしくはトタン葺きの中門をつけた家を「東中門」とよんでいます。家の周囲には「タネ」と称する融雪池が設けられており、屋根から下ろした雪を投げ入れて融かしてしまふのです。一般に雪国の軒先は短いのは、屋根に積もる雪が重い

からです。そこで経済的に余裕のある中農以上では、屋根先に梁をたくさん出して、重い積雪を支えています。そのさまが船の櫂に似ているので、「船櫂（櫂）造り」とよんでいます。戸隠村中社や白馬村・小谷村などでよくみられます。

日本海側の都市には、積雪期歩道として使われる「雁木」があります。長野県では飯山の町のみで設けられています。雁木のある空間は私有地ですので、道の舗装や屋根の設置はすべて沿道の家の個人負担になっています。

木曾・伊那など長野県南部は、年降水量が二五〇〇〜三〇〇〇ミリメートルに達する東海型の多雨気候地域です。夏風雨が強い伊那盆地では、住宅は東に向いてつくられている場合が多く、家屋の南には壁に平行して「沫除け」と称する雨除けが設けられています。

蚕糸業の遺産・蚕室

一八九六年（明治二九）綿花輸入の自由化、一九〇一（明治三四）年官営八幡製鉄所の開設などの産業革命の進展とともに、長野県では蚕糸業が大きく発展し

ました。そのころ、養蚕農家や蚕種製造の種屋が争うように、大きな蚕室を建てました。それまでの農家は平屋が一般的でしたが、蚕室は通風がよいと蚕が健康に育ち、上質の繭ができたので、瓦葺きで二階建ての大きな蚕室を建てました。屋根の棟には「高窓」・「檜」・「煙出し」・「気抜け」などとよばれた建造物を設けました。これは蚕室内の空気の流通をよくしたばかりか、建物の規模が大きく、白壁・瓦葺きの蚕室とともに、現代信州における農村風景をより美しいものにしていきます。

豪農・豪商がつくった本棟造り

松本盆地と伊那・木曾地方しかみられない風土色の強い建築に「本棟造り」があります。これによく似たものに、富山砺波両平野における「東建て」の民家があります。本棟造りの方が規模が大きく、一〇〇坪（約三三〇平方メートル）に達する家もあります。切妻の妻入り、板葺きの石置き屋根、棟には「雀踊り」とよばれる棟飾りがあり、屋根裏も住居になっています。江戸時代松本藩・尾張藩・高

遠藩・天領などの大庄屋をつとめていた豪農・豪商たちが藩の許可を得てつくった建物が、本棟造りでした。今でも「本棟造り」と称して、新築する人がいるほど、現代でも本棟造りに対する志向が強いようです。

本棟造りは農村や浅間温泉のような町でもよくみられますが、北国西街道の郷原宿や伊那街道の小野宿などにもあり、宿場町の景観をひきたてています。

冬寒い諏訪盆地では、土蔵を母屋の中に組み入れた「建てぐるみ」というめずらしい建物がつくられています。北海道以上に寒い長野県で遅れているものに耐寒住宅があります。亜熱帯のアメリカ南部でさえ、ふつうにみられる二重窓住宅が県内にはあまり見当たりません。信州に最初につくられた二重窓の住宅は、長野電鉄の神津藤平社長の志賀高原の別荘です。昭和初めに建てられ、現在猪ヶ谷六合雄記念館になっています。また公共建物では一九一九年（大正八）に建てられた旧制松本高等学校の思誠寮も二重窓になっています。（市川健志

参 考 文 献 (五十音順、敬称略)

- 『赤い土器のクニ』(財)長野県埋蔵文化財センター 一九九四)
- 『朝日百科 日本の歴史1 原始・古代』(朝日新聞社 一九八九)
- 『伊賀良の民俗』(伊賀良村史刊行会 一九七三)
- 『伊賀良の民俗』(伊賀良公民館 二〇〇一)
- 『一乗谷』(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 一九九二)
- 『いま信濃の歴史はよみがえる』(財)長野県埋蔵文化財センター 一九九二)
- 『上田市誌 民俗編(二) 衣食住とくらし』(上田市 二〇〇一)
- 内田青蔵・大川三雄・藤谷陽悦『図説・近代日本住宅史 幕末から現代まで』(鹿島出版会 二〇〇一)
- 『絵巻物の建築を読む』(東京大学出版会 一九九六)
- 『大井城跡(黒岩城跡)』(佐久市教育委員会 一九八五)
- 『大町市埋蔵文化財調査報告書第23集 郷土を知る1(発掘調査概要) 須沼—中世須沼氏居館跡の調査—』(大町市教育委員会 一九九三)
- 『大町市埋蔵文化財調査報告書第25集 郷土を知る3(発掘調査概要) 須沼—中世須沼氏居館跡の調査2—』(大町市教育委員会 一九九四)
- 教育委員会 一九九四)
- 小口基実『信州の庭園』第一、八、九巻(小口グリーンエクステリア 一九七六、一九八八、一九九〇)
- 『改訂長野県文化財めぐり』(社)長野県文化財保護協会 一九九八)
- 神村 透『高森町北原遺跡』(『長野県考古学会誌』第四号、長野県考古学会 一九六七)
- 『季刊考古学31 環濠集落とクニのおこり』(雄山閣出版 一九九〇)
- 『季刊考古学32 古代の住居—縄文から古墳へ—』(雄山閣出版 一九九〇)
- 『季刊考古学36 古墳時代の豪族居館』(雄山閣出版 一九九二)
- 『季刊考古学44 縄文時代の家と集落』(雄山閣出版 一九九三)
- 『季刊考古学64 解明の進む縄文時代の実像』(雄山閣出版 一九九〇)
- 『北原遺跡』(高森町教育委員会 一九七二)
- 『熊谷元一写真全集』(郷土出版社 一九九四)
- 『黒井峯遺跡』(読売新聞社 一九九四)
- 『考古資料集 原始・古代の豊丘』(豊丘考古学研究室 一九八二)
- 『古代史復元2 縄文人の生活と文化』(講談社 一九八八)

- 『古墳時代の研究2 集落と豪族居館』（雄山閣出版 一九九〇）
- 酒井幸則「パン状炭化物・伴野原遺跡」（『どるめん』第一号 一九七七）
- 『佐久市志 歴史編（一）』（佐久市 一九九五）
- 佐々木高明『日本の歴史① 日本史誕生』（集英社 一九九一）
- 佐原真『大系日本の歴史1 日本人の誕生』（小学館 一九八七）
- 佐原真・春成秀爾『歴史発掘⑤ 原始絵画』（講談社 一九九七）
- 『静川16遺跡発掘調査報告書』（苫小牧市教育委員会 一九八三）
- 『信濃の風土と歴史① 歴史館さんぽ』（長野県立歴史館 一九九四）
- 『信濃の風土と歴史③ 中世の信濃』（長野県立歴史館 一九九七）
- 『写真集「諏訪社遊楽図屏風」』（諏訪市博物館 二〇〇一）
- 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5—長野市内その3—松原遺跡』（財長野県埋蔵文化財センター 一九九八—二〇〇〇）
- 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12—長野市内その10—榎田遺跡』（財長野県埋蔵文化財センター 一九九三）
- 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書24—28—更埴市内その3—7—更埴条里・屋代遺跡群』（財長野県埋蔵文化財センター 一九九八—二〇〇〇）
- 『シルクと金唐紙の館 旧芬林家住宅調査報告書』（岡谷市教育委員会 二〇〇一）
- 『信州の大遺跡』（郷土出版社 一九九四）
- 『図解 日本の人類遺跡』（東京大学出版会 一九九二）
- 『図解 日本の中世遺跡』（東京大学出版会 二〇〇一）
- 『諏訪市制50周年記念写真集 なつかしいあの頃』（諏訪市 一九九二）
- 『続日本の絵巻1 法然上人絵伝 上』（中央公論社 一九九〇）
- 『続日本の絵巻13 春日権現験記絵 上』（中央公論社 一九九一）
- 『太陽 城下町古地図散歩3 松本・中部の城下町』（平凡社 一九九六）
- 『太陽 城下町古地図散歩5 萩・津和野山陰・近畿（2）の城下町』（平凡社 一九九六）
- 多田井幸視「養蚕農家の住居空間について」（『信濃』第三〇巻第一〇号 一九七八）
- 『棚畑』（茅野市教育委員会 一九九〇）
- 『茅野市尖石縄文考古館常設展示図録』・リーフレット（茅野市尖石縄文考古館 二〇〇一）

『茅野市の民家』(茅野市教育委員会 一九七三)

『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書6—松本市内その3—下神遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター 一九九〇)

『天神一号墳確認調査報告書』(須坂市教育委員会 一九七七)

『トイレの考古学』(大田区立郷土博物館 一九九七)

鳥羽英継「古代のあかり」(『長野県考古学会誌』第九六号)

長野県考古学会 二〇〇一)

外山英策『室町時代庭園史』(思文閣出版 一九三四)

『富山市北代縄文広場 北代縄文館』(富山市教育委員会 一九九九)

『長野県史 美術建築資料編全一卷(二) 建築写真集』

『長野県統計書』(長野県 一九五三—一九七〇)

『長野県宝 中村家住宅修理工事報告書』(美麻村 一九九七)

『新潟県立歴史博物館常設展示図録』(新潟県立歴史博物館 二〇〇〇)

『日本の絵巻5 粉河寺縁起』(中央公論社 一九八七)

『日本の絵巻20 一遍上人絵伝』(中央公論社 一九八八)

『日本の美術11』(No.四〇二)「城と城下町」(至文堂 一九九九)

『日本歴史館』(小学館 一九九三)

『復原 技術と暮らしの日本史』(新人物往来社 一九九八)

『平成一三年秋季企画展図録 弥生クロスロード』(大阪府立弥生文化博物館 二〇〇一)

『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書4—長野市内その1—篠ノ井遺跡群・石川条里遺跡・築地遺跡・於下遺跡・今里遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター 一九九八)

『弥生文化の研究7 弥生集落』(雄山閣出版 一九八六)

『よみがえる五世紀の世界』(かみつけの里博物館 一九九九)

『立体復原 日本の歴史(上) 原始・古代編』(新人物往来社 一九九七)

福島紀子『諏訪社遊楽図屏風』の語るもの』(『信州自由人』第四号 龍鳳書房 二〇〇一)

『松本市文化財調査報告書 一二二 松本城下町跡伊勢町—近世町屋跡の発掘調査—』(松本市教育委員会 一九九六)

『丸山・北原』(群馬県教育委員会 一九九三)

『三角 三角遺跡群諏訪田遺跡、社軍神遺跡緊急発掘調査概報』(丸子町教育委員会 一九八〇)

みよし風土記の丘ミュージアム「道具と木のはなし」(『歴史風』第二二号 一九九八)

山崎ます美「灯火具『瓦灯』についての一考察」(『高井』第一〇八号 高井地方史研究会 一九九四)

『倭城—城郭遺跡が語る朝鮮出兵の実像—』(倭城研究シンポジウム実行委員会、九州大学 一九九九年五月二九—三〇日)

協力者のみなさん (五十音順、敬称略)

阿智村教育委員会

群馬県教育委員会

知恩院

林 茂樹

阿部義彦

群馬県子持村教育委員会

茅野市教育委員会

姫路市広報広聴課

飯塚 聡

県立長野図書館

茅野市尖石縄文考古館

兵庫県立歴史博物館

飯田市誌編さん室

粉河寺

堤 隆

平泉町文化財センター

市沢英利

小林純子

東京国立博物館

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

上田市立信濃国分寺資料館

西大寺観音院

東部町教育委員会

仏法紹隆寺

大阪府立近つ飛鳥博物館

酒井幸則

苫小牧市埋蔵文化財調査センター

堀内伸二

大阪府立弥生文化博物館

栄村教育委員会

富山市教育委員会

堀内新也

大田区立郷土博物館

佐久市教育委員会

豊丘考古学研究室

堀越知道

大町市教育委員会

佐久地方事務所林務課

鳥居 亮

松本市教育委員会

岡谷市教育委員会

塩尻市教育委員会

中野市教育委員会

松本城管理事務所

岡山県立博物館

塩尻市立平出博物館

中野市歴史民俗資料館

松本市立博物館

小原 稔

篠ノ井高等学校同窓会

長野県企画局企画課

松本市立考古博物館

折井正明

下伊那教育会

長野県建築士会

丸子町教育委員会

上伊那郷土館

信州木曾の家協同組合

長野県政策秘書室

美麻村教育委員会

開善寺

小学館

長野県埋蔵文化財センター

宮島宏江

かみつけの里博物館

須坂市立博物館

新潟県立歴史博物館

望月町教育委員会

唐木田実

諏訪市博物館

西本願寺

横浜市埋蔵文化財センター

北相木村考古博物館

ソーラーシステム株式会社

野明弘義

山下 徹

宮内庁書陵部

滝沢敬一

野澤庸夫

熊谷元一

竹中大工道具館

能登 健

あとがき

長野県立歴史館では、毎年一冊ずつ、テーマをきめてブックレットを発行しています。八冊目のこの本は、住まいの歴史について、小学生や中学生のみなさんにも興味をもって読んでもらえるように企画編集したものです。最新の研究成果も取り入れながら、長野県内の資料や県立歴史館の展示資料を中心に構成してみました。みなさんの学習にも役立つものと思います。

この本を参考にして、歴史をもっと深く勉強してみたいというみなさんは、ぜひ歴史館へ来てください。歴史館ではこの本にのっている資料の展示や多くの歴史の本などを公開しています。また、専門の職員がみなさんの質問にもお答えします。

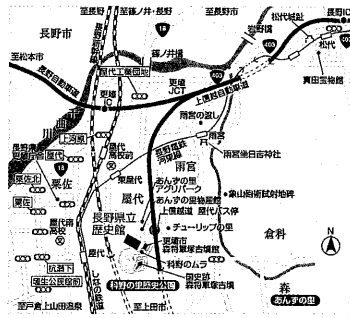
本書のために、貴重な写真や資料などを快くご提供くださった多くの方がたにお礼申し上げます。

二〇〇二年三月

長野県立歴史館

編集・執筆

伊藤羊子 市川包雄 市川健夫 太田典孝 小野和英
 片岡 務 久保統弘 白沢勝彦 田玉徳明 田村栄作
 傳田伊史 祢津宗伸 野澤誠一 原田 孝 樋口和雄
 溝口 登 宮脇正実 村石正行 山崎哲人



利用案内

〔開館時間〕

午前九～午後五時
 (入館は午後四時三〇分まで)

〔休館日〕

月曜日(祝日・振替休日にあたる場合は火曜日)
 祝日の翌日(日曜日にあたる場合は開館)
 燻蒸等館長が定める日

十二月二十八～一月三日

〔常設展覧覧覧〕

一般 高校・大学生 小・中学生

個人 三〇〇円 一五〇円 七〇円

団体 二〇〇円 一〇〇円 五〇円

(団体二〇名以上)

学校の教育活動として観覧する長野県内の小・中・高校生および障害者手帳をお持ちの方と介護者の方は減免になります。

〔交通案内〕

長野新幹線上田駅で乗り換え、しなの鉄道屋代駅から徒歩二五分、屋代高校前駅から徒歩二五分

長野電鉄河東線屋代駅から徒歩二〇分

長野自動車道・上信越自動車道更埴ICから車五分
 高速道路バス停「上信越道 屋代」から徒歩三分

長野県立歴史館

信濃の風土と歴史⑧ 住一たてる・すむ・くらす一

二〇〇二年(平成一四)三月二〇日発行

編集・発行 長野県立歴史館

千三八七―〇〇〇七 長野県更埴市屋代字清水二六〇一六

電話(代)〇二六一二七四―二〇〇〇

FAX 〇二六一二七四―三九九六

http://www.npmh.net

印刷 信毎書籍印刷株式会社

